

第3章 わかやまの自然と生活



城下町から近代都市へ



内堀と丸の内のビル街（和歌山市）

そとぼり いちほりがわ きょうぼし
ら外堀の市堀川の南にあった京橋御門まではかつては丸の内と呼ばれ、上級武士の屋敷地でしたが、今は市役所・銀行などが建ち並ぶ政治・経済の中心地となっています。京橋から北へと続く本町通りはかつての町人町で、今も商店が集中する本町商店街となっています。また、和歌川沿いには、染色・木工・皮革などの工場が建ち、紀ノ川河口の海岸は製鉄・化学工場地帯となっています。

和歌山市の玄関は、東の JR和歌山駅と北の南海電鉄和歌山市駅です。また、和歌山港からは四国と結ばれ、関西国際空港にも近く便利です。

市内には、T字路になったかつての城下町の道路も残っていますが、南北の「中央通り」、東西にのびる「けやき大通り」など、広く美しい並木道に変わりました。

かつて外堀であった市堀川や和歌川の水質汚濁をなくすために、紀ノ川の水を入れたり、汚水処理場をつくっています。

県都・和歌山市

和歌山市は、とよとみひでよし ちくじょう あさの よしなが
豊臣秀吉が築城をはじめ、のち浅野幸長
が城下町を整備しました。1619（元和5）年、徳川頼宣
が55万5,000石の藩主として入国してからは、御三家紀
州藩の城下町にふさわしく拡張し栄えました。

今も和歌山城には、古くからの石垣や内堀が残り、第二次世界大戦後に復元された天守閣が海拔49mの虎伏山にそびえています。歴史の面影をしのばせる公園として市民に親しまれています。内堀に面した一ノ橋御門か



*2 和歌山市街の中心部

0 100m

*1 城下町には道路をT字型にして行きどまりをつくり、外敵を防ぐ役目もあった。
*2 国土地理院1万分の1地形図「和歌山」（1999年）。



*1 城下町であった田辺

紀南の中心都市・田辺市

田辺の城は、1590（天正18）年、会津川河口の右岸に豊臣秀吉の家臣杉若氏の上野山城があり、のちに浅野氏の州崎城、さらに田辺城と三たびかわりました。田辺は1619年、紀州徳川家の家老安藤氏の領地となり、城下町も整えられました。現在は水門の石垣が残されているにすぎません。

会津川対岸の江川は、江戸時代から廻船が停泊した港でしたが、1927（昭和2）年の大阪商船の寄港からのちは、文里の港に移りました。

1932年に紀勢西線が田辺まで開通して、海路にかわって、J R紀伊田辺駅が田辺の玄関となりました。田辺市は、2005（平成17）年に周辺町村と合併し、人口は約8万人（2008年）の県内第二の都市です。梅干・製

材・水産加工品・ボタンなどの地場産業をもち、商業の範囲は紀南地方におよんでいます。

田辺市は、かつての城下町の狭い道をなくし、1981年にはJ R紀伊田辺駅前から南へ幅18mの「田辺大通り」、さらに東西に「元町新庄線」が市内の中心道路となりました。また市内には、「袋町」の地名もあるように、行き止まりの多かった町並みも新しい土地区画整理事業が実施され、住宅団地も周辺の丘陵に建てられています。また、国道42号のバイパスが郊外につけられるとともに、2007年、阪和自動車道が田辺まで開通し、インターチェンジができました。



会津川と田辺城の水門・本丸跡（田辺市）

熊野の城下町・新宮市

新宮は、熊野三山の一つ速玉大社の門前町であり、江戸時代からの城下町でもあります。町の中央をとる国道42号となっているかつての熊野街道の西側に門前町、東側に武家屋敷がありました。

1601（慶長6）年、浅野氏が熊野川河口の丹鶴山に城を築きはじめましたが、1619年紀州徳川家の家老水野氏が城主となり、城郭を整備しました。城あとには今も石垣が残し、公園となっています。



新宮城址からみた市の中心街（新宮市）

新宮は、熊野地方の木材の集散地であり、その運搬は1962年の国道168号の開通によって、かつての筏流しからトラック輸送に変わりました。そして、熊野川河口の水面貯木場は埋め立てられ、スギ・ヒノキの熊野材の原木市場となりました。一方、三輪崎にある新宮港は、おもに外国から木材やチップ材を輸入し、市内製材・製紙工場で染色にしたのち、地元のほか、東京・名古屋方面に出荷されています。また新しく自動車・電子関係の工場もできました。

*1 国土地理院5万分の1地形図「田辺」（1997年）。

*2 1901（明治34）年ごろ、朝来（上富田町）で副業として貝ボタンが作られはじめ、のち田辺市に広まった。